

歯牙腫摘出後下顎第2小臼歯の萌出誘導を行った1例

三田市・大槻歯科医院 大槻 榮人（歯科医師）

歯牙腫は歯を構成する硬組織を含む混合性の歯原性腫瘍である。歯牙腫のため歯の萌出遅延を招き、歯牙腫を摘出しても自然萌出する可能性は低いとされている。今回、 $\overline{5}$ 部に集合性歯牙腫により同歯の萌出遅延を発症した症例に対し、萌出誘導を行った。

【症例】

症例は12歳6カ月の女兒で、 $\overline{5}$ 萌出遅延を主訴に来院した。初診時パノラマ X-写真により、 $\overline{6}$ 近心に石灰化物様の不透過像を認め、 $\overline{5}$ は下顎下縁に埋伏しており歯根未完成であった。3D-CT撮影では、約1.5cmの歯牙様構造物が集合した所見が認められ、集合性歯牙腫と診断した。

【処置および経過】

12歳8カ月時、局所麻酔下にて $\overline{5}$ の顎骨腫瘍摘出術を行い、同部は開放創とした。その後、経過観察中に隣在する $\overline{6}$ の近心傾斜を認めたため、13歳8カ月時より、 $\overline{2}$ から $\overline{6}$ に至るセクショナルアーチを装着し、オープンコイルでスペースを確保した。13歳11カ月時、 $\overline{5}$ の一部歯冠を認め、14歳4カ月時同歯の完全萌出を認めたため、同9カ月時矯正装置を撤去し、経過観察とした。

【考察】

今回、集合性歯牙腫のために $\overline{5}$ の萌出遅延をきたした症例に対して萌出誘導を行い、完全萌出を認めた症例を経験した。Kämmerらは、45例の歯牙腫症例のうち、埋伏歯の自然萌出を認めたのは2例のみで4例は矯正治療により牽引したと報告し、歯牙腫に伴う埋伏歯の自然萌出は困難であるとした。今回歯牙腫摘出後、隣接する $\overline{6}$ の近心傾斜により、萌出スペースが減少してきたため、セクショナルアーチを用いて萌出スペースを確保した。加えて同歯は歯根未完成であったため萌出路を確保することにより、開窓・牽引せずに萌出できたものと考えられた。